問Ⅰ　以下の文章を要約しなさい(400字以内，算用数字も1字として扱う)。

問Ⅱ　以下の文章の筆者は，引用した文章に続けて，1980年代半ば以降，「学歴社会の是正」「教育における個性の重視」「教育の自由化」など，日本の教育のあり方について様々な見直しの議論があることを指摘し，「能力主義と平等主義の組み合わせに変更を加え，新たな教育理念を教育の現場に持ち込むことは，従来の教育と社会とのむすびつきを変えることになる」と述べている。

「能力主義と平等主義を絶妙に調合した」教育の上に成り立ってきたこれまでの日本の「大衆教育社会」が，今後どうあるべきかについて，あなたの考えを述べなさい(800字以内，算用数字も1字として扱う)。

教育の大衆的な規模での拡大と，社会の大衆化の進展，教育を通じた階層的秩序の編成と，中流意識の広がり。戦後の日本は，1950～70年代を通じて，大衆教育社会と呼びうる社会をつくりあげてきた。その完成がいつごろであったのか，明確に時代を画することは容易ではない。おそらくは，教育への大衆の動員が最高潮に達し，平等主義が社会のすみずみにまで広がり，さらには「中流」意識をもつ人びとの割合が90％を超えて維持された，1970年代半ばごろであったといえるだろう。

大衆の教育への動員，メリトクラシーの大衆化，形式的平等の追求，明確な文化的アイデンティティをもたない学歴エリートの創出，そして，教育における〈不平等〉を不問に付す平等信仰――それでは，こうした特徴を合わせもつ大衆教育社会の成立は，戦後の日本にとって，どのような意味をもったのか。

第一に，経済との関係において，大衆教育社会は経済成長にきわめて適合的な条件を提供した。教育の普及が経済の成長にとって重要な要因のひとつであることは，「人的資本論」を引くまでもなく，よく知られた知見である。しかし，勤労者の知識や技術の水準を高めることだけが，教育の経済への寄与ではない。協調性を養うことで企業組織の一体感を高め，組織内での社会関係の摩擦を抑えること。業績主義的な心情をもつ勤労者を増やすこと。さらには，労働力の配置をスムーズに行なうこと。平等主義を基調としながらも，このように能力主義を徹底し，しかも内部に分断された社会層を極力形成しない社会をつくりあげるうえで，戦後日本の教育は多大な貢献を

なした。戦前にはまだあった身分や階級の刻印を消し去り，労使間の良好な関係をつくりあげるうえで，教育を通じた大衆社会の形成が重要な役割を果たしたのである。このような意味で，大衆教育社会は，高度で柔軟な経済運営を可能にする条件を用意したといえる。

第二に，社会の階層的秩序の形成にとって，大衆教育社会は重要な役割を演じた。「客観的」に比較すれば，学歴がその後の社会での成功にむすびつく度合いは，日本だけが極端に大きいわけではない。にもかかわらず，日米比較が示すように，日本では子どもたちが，学校での成績によって将来が決まると思い込む傾向が強い。学校での成功と失敗が将来を左右するという見方が，「客観的」に測定された学歴の効果以上に，人びとに強く意識されているのである。学歴社会という社会認識に導かれた人びとの意識に注目すれば，教育が社会の階層化に果たした役割は「客観的」に測られた事態以上に大きかったのである。

第三に，社会の階層性の正当化という点で見ても，大衆教育社会の寄与するところは大きかった。大衆社会は，平等社会と同じではない。不平等を抱えた社会である。しかし，社会の大衆化は，社会的な不平等を大きな問題として取り上げなくなる心理的基盤をつくりだす。人びとの意識の基底に平等意識を植えつけ，しかも，学校を通じて形成される不平等を受け入れる。平等観や〈中流〉意識の形成においても，戦後教育の果たした役割は小さくない。大衆教育を通じての大衆社会の誕生が，学校の場で生まれる社会的不平等を正当的なものとして受容する心理的基盤をつくりあげたのである。

メリトクラシーを社会の編成原理のひとつに置く近代社会において，不平等の生成と正当化は，学校にゆだねられた重要な役割である。教育を通じて測定される「業績(メリット)」をもとに，人びとを社会経済的地位に配置する。先進産業社会ではどこでも，教育を通じたメリトクラシーが，社会的不平等の生成と正当化に大きくかかわっている。

ところが，教育を通じたメリトクラシーといっても，その具体的なプロセスには，社会によって大きな違いがある。たとえば，イギリスやフランスでは，教育の場で業績を測定する際に，論述式の試験や口述試験が重視されている。このような場合，正しい語法やアクセント，レトリックの使い方といった，主に言語表現にかかわる出身

階層の文化が，業績評価のプロセスに入り込む。出身階層の文化と試験で測られる文化との距(へだ)たりが小さいのである。その結果，学校での成功のチャンスは，どのような階層文化を身に付けたか――いいかえれば，どのような家庭に生まれたのか――によって左右されることになる。

親から子へと家庭で伝達される階層文化を媒介として，社会的不平等が再生産される。こうしたメカニズムは「文化的再生産」と呼ばれる。そして，学校は，この文化的再生産のなかで，相続された階層文化――フランスの社会学者，ブルデューのいう「文化資本」――を，学校での成功に変換し，それによって不平等を正当化する重要な機関と見なされている。

それでは，日本の場合は，どうだろうか。たしかに，戦後の日本社会でも，どのような家庭に生まれたのかによって，学校での成績が違ったり，どのような学歴を得られるのかが異なっていた。その意味で，日本でも，教育を通じた不平等の再生産が行なわれていることは間違いない。家庭で伝達される文化資本が学校での学力に変換されて，世代間の不平等が再生産されるしくみは，日本でもはたらいてきたのである。

しかしながら，他方で日本の場合には，学校で測られる業績＝メリットは，特定の集団や階層が伝統的に占有していた文化からとり出されたものではないと考えられている。いいかえれば，学校での勉強の中身や試験問題の内容は，どの集団の文化にも属さない「中立的」なもののように見える。少なくともフランスやイギリスの場合に比べれば，特定の階層文化と学校で評価される業績との重なり合いは目立たないといってよいだろう。学歴取得による「生まれ変わり」が可能であると信じられる背景には，階層文化の刻印を消去しやすい，こうした日本の学校システムの特徴があったのだ。

それでは，階層文化から「中立的」に見える業績を通じて，不平等の再生産が行なわれることは，その社会にとってどのような意味をもつのだろうか。

ひとつの解答は，学校が不平等の再生産に寄与しているという事態が見えにくく，問題になりにくいことである。学校で評価される学力と，特定の階層出身者の文化との親近性が，だれの目にも明らかな場合，結果的に学校が不平等の再生産に寄与していることは，社会から問題にされやすい。言語表現の面にしろ，態度や行動様式にしろ，子どもたちが階層文化の刻印を強く受けており，しかも，学校がそのような階層差を業績とむすびつけるしくみをもつ場合には，どのような家庭出身の子どもが学校

で有利，不利になるのかが，目立ってくるからである。

フランスやイギリスにおいて，あるいは人種間の問題として見た場合のアメリカなどで，「文化的再生産」の議論が盛んに行なわれるのも，階層文化を媒介とした不平等の生成が，可視的でリアリティをもつからだ。学校は，どの階層の子どもたちに対しても，公平な扱いをしている。どの子どもにも，学校で成功するうえで，同じ条件が与えられているはずだ——そうした信念への疑義の提出。「文化」の顕在性ゆえに，これらの社会では，学校を通じた不平等の再生産が，その過程で不覚にも綻(ほころ)びをみせてしまうのである。

それに対し，日本の学校は，そのような綻びをほとんど外に見せることなく，見事に不平等の再生産を果たしてきた。日本でも，家庭で伝達される文化資本が，学校での成功を左右していることはたしかである。文字や数字などの記号を操る能力，丹念に論理を追う能力，ものごとをとらえるうえで具体から抽象へと飛躍する能力。これらの能力の獲得において，どのような家庭のどのような文化的環境のもとで育つのかが，子どもたちの間に差異をつくりだしていることは否定しがたい。そして，こうした能力の違いが学校での成功と失敗を左右するであろうことも容易に想像できる。それでも，日本の場合には，学校で測られる学力は，特定の階層の文化から「中立的」であると見なされている。しかも，生得的な能力の差異をなるべく否定し，「子どもにはだれでも無限の能力，無限の可能性がある」と見る能力＝平等観が広まっている。そして成育環境の違いと成績との関係をむすびつけて見ること自体にも，子どもに差別感を与えるのではないかと慎重な態度がとられるのである。がんばればだれでも「100点」がとれるとする努力主義信仰も根強い。日本でも「客観的」に見れば，子どもの出身家庭と成績との間に相関関係を見いだせるのだが，そうした事実自体を，教育実践の前提とはしない傾向が強いのだ。それゆえ，大衆教育社会が完成の域に達した以降は，特定の階層や集団にとって日本の教育システムが有利にはたらいているという見方それ自体が，多くの人びとにとってはあまりピンとこない現実となっている。それほどまでに教育を通じた社会の大衆化が進展したのだ。実際には学校を通じて不平等の再生産が行なわれていても，そのような事実にあえて目を向けないしくみが作動しているといえるのである。

不平等を再生産すると同時に，そうした事態を問題視する視線をさえぎる。不平等

を正当化するうえで，もっとも有効な方法が，大衆教育社会成立のなかで編み出されたのである。

1970年代半ばに完成した大衆教育社会は，しかしながら，その足元からゆらぎはじめた。日本型大衆社会は，能力主義と平等主義とを絶妙に調合した教育を基軸に編成された。その教育が大きく変わろうとしている。それに連鎖して，大衆社会の様相にも変化のきざしが見えはじめたのである。

（苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ――学歴主義と平等神話の戦後史』より抜粋）